

# 音楽の授業を魅力あるものにするにはどうしたらよいか

## (基礎資料)

佐伯正一

### 前がき

音楽教育の学力を高めるということは、私達音楽教育者の責任であることはいまでもないが、音楽の学力とは何を意味しているのか。この事について、ある人は、音楽教育の学力は考えられないと主張し、ある者は、教育である以上学力を認めるべきだと考える者など種々の問題があるようであるから、一応この問題自身から離れて、他の角度から考えてみたい。

音楽教育は、他の知的教科に比べて、感情的というか、感覚的といった方がいいか、いずれにしても、こういった異質的な教科であるので、授業そのものに、生徒の情緒的な感動をよびおこすものでなければ、音楽教育の本質にそわないものだといえるだろう。

そこで、日頃の生徒の授業の中で、どうすれば、生徒に音楽の魅力を与えることができるだろうか。

これが私達教育者の課題であり、問題点であると考えている。

いいかえれば、音楽を好きにさせるということが、この教育条件でなければならない。

しかし、この問題は、道徳教育のいかにむづかしいかということに通じるものがある。それは、生徒の精神的な動きを教育する点にあるからである。

音楽の授業に興味をもたせることは、非常に大切なことであるが、指導上の興味に終ってはならない。そこに、力一杯努力して作り上げた音楽、その苦勞の中に得る楽しみ、すべてが、音楽する喜びにつながるものでなければならない。

音楽の授業の魅力の中には、音楽そのものに対するものと、そのための過程に対するものが考えられる。前者は、曲を完成する喜びであり、後者は、その喜びを、さらに大きく、深いものにするために行われる基礎能力を身につける喜びであろう。

ややもすると、現場の私達は、いろいろのテストの制約のために、あるときは知的に傾き、あるときは、基礎能力のために終始する危険性がないとはいえない。私自身もこのことに陥って、はっとしたことがある。

これは、文部省の指導要領には、音楽の要素的なものが、あまりにも、詳細に、親切に指示しているので、ついあれも、これもやらなければならない要素的な印象が強過ぎるからではないだろうか。

大切なことは、指導要領や教科書に表われていることではなくて、むしろそこに表わすことのできない音楽そのものを作り出すこと自身に大きな意味があり、また音楽教育のポイントがあるのである。

教科書や、指導要領は、音楽を作り出す方便でなければならぬ。教科書や、指導要領にとらわれたために生きた音楽を作り出すことができないとすれば、本末をまちがえたものというべきであろう。

こんなことから、研究を進めるための手がかりとして、次のような参考資料をとることにした。まず、歌曲や器楽曲をどこまで表現し得ることができるか。そしてそれをどこまで感じとることができるかということにしぼってみたいと思った。

丁度、二学期の文化祭を機会に、音楽会をクラス全員によって歌曲三曲、器楽曲一曲を選んで、全クラス出演を計画したのである。

この練習に費した時間は、授業時間を約10時間あてたのである。(課外なし)

この間は、教科書の内容を進めることはできなかったが、(曲の大部分は教科書から選んだ)これは、前に述べたように、より音楽を作り出す喜びを与えることができると思ったからである。

### 研究(資料)

調査1. 教科書による普通授業と、音楽会の準備練習(音楽を作り出す授業)と、どちらがよいか。

	曲を仕上げるための授業がよい	教科書による普通の授業がよい
中1	43.8%	55.2%
中2	63%	37%
中3	67.5%	32.5%
計	59%	41%

曲を仕上げるための授業の方がよいとする者は、中1から順に、中3の方へ多くなっている。教科書による普通授業の方がよいとする者は、中1だけで、全体としても、音楽を作り出す喜びに魅力があるようである。

以下の調査は、参考資料とするための調査である。  
調査2. 音楽の授業が楽しいか、それとも楽しくないか。

B 表

	楽しい	普通	楽しくない
中 1	39.2%	47 %	13.8%
中 2	51 %	31 %	18 %
中 3	38 %	47.5%	14.5%
計	43 %	42 %	15 %

この表のように、楽しくないと思っている者は、全体の15%いるが、この大部分は、楽器の演奏がよくできない、歌が思うように歌えない、譜がよく読めない、など音楽の基礎的なものに原因のあることを訴えている。

ここで考えられることは、音楽を作り出す表現の困難よりも、視唱力、聴音力などの基礎的なものに困難を感じている者の方が、意外に多いということである。

もともと、これについて各人差が大きいし、一斉授業にこれを補うということは、非常にむずかしい。だからといって、やらないわけにはいかない。ここで、この不足を補うための適切な内容を授業に織り込んでいかなければならない。

調査3. 器楽と歌唱学習についてどちらがよいか。

C 表

	器楽がよい	歌唱がよい	どちらもよい	どちらもきらい
中 1	32.6%	35 %	24.6%	7.8%
中 2	10.3%	45.5%	40 %	4.2%
中 3	16.9%	43.1%	38 %	2 %
計	19.7%	41.3%	34.2%	4.8%

全体として、器楽学習を好む者が(「どちらもよい」の項の者も加算) 53.9%で、歌唱学習を好む者が(器楽のように加算) 75.5%である。

歌唱を好む者が、大変多いことは、従来と同様である。

調査4. 階名唱

D 表

	階名で歌うのがよい	階名で歌う必要はない
中 1	82 %	18 %

中 2	84.3%	15.7%
中 3	78 %	22 %
計	82 %	18 %

調査5. 視唱の基礎練習

E 表

	やった方がよい	やらない方がよい
中 1	81 %	19 %
中 2	66 %	34 %
中 3	64.5%	35.5%
計	69 %	31 %

調査6. 創作

F 表

	やりたい	やりたくない
中 1	68.5%	31.5%
中 2	63 %	37 %
中 3	58 %	42 %
計	63 %	37 %

調査7. 聴音

G 表

	やる方がよい	やらなくてもよい
中 1	56 %	44 %
中 2	58 %	42 %
中 3	73 %	27 %
計	63 %	37 %

調査4は、歌曲の階名唱をどんな考え方をしているかを調査したものである。

この調査4から7までの右欄の計の欄に表われている数字、すなわち、D表の18%、E表の31%、F表の37%、G表の37%は、いずれも、不得意であることは、十分想像されるが、不得意であっても必要性を感じ、それに興味も加わるような指導をしなければならない。

それには、前にも述べたように、技術のための技術としてではなく、音楽をよりよく、より深く、より楽しくするために大切であることを、生徒自身に悟らせるような指導が望ましいと思う。

それには、あくまでも音楽を作り出す喜びに結びつけているものでなければならない。

## 結 び

今度の音楽会で生徒は何を感じ、何を得たかを、生徒の感想文の中から、生徒の実感を拾ってみたい。

出演してみたの感想

- ステージに立った感動は忘れることはできない
- 練習の時のようには、うまくいかなかったのは残念だ。次回にはしっかりやらなければならないと思った。
- ステージに立った時は、恥しかった。
- 出演時のいろいろの動作は、何でもなかったのに、いざ本番には思うようにやれなかった。
- 演奏には全力を尽したし、皆もしんけんだった
- チームワークがいかに大切であるかということが、よくわかった。
- 日頃の練習には、しんけん、しかも十分の練習が必要であることがよく感じられた。
- よく指揮に注意して演奏しなければならないと思った。

これらの感想文の中から、音楽を作り上げるための努力とその経験が、いかに生徒の心の中に、新しい音

楽への感動を、よび起されたかを察知することができまた人間形成への大きな教育の場であったかを思うとき、音楽教育の使命の重要性を改めて考えさせられたわけである。

また、音楽会を聞く立場からの感想文については、速度のちがいが表現に大きく左右すること、発声がよい音楽を作るためにいかに大切であるかということ、演奏に対する判断力がつくこと、演奏態度はいかに大切であるかということ、静粛な聞き方が、大切であることなど、私達のように音楽を学んできた者が、あたりまえと思われることが、生徒にとっては新しい印象として、音楽に対して改めて考える絶好の場であった。

このように、音楽に対する正しい考え方が一歩前進したことは、人間としての前進であり、これでこそ音楽教育の意義があるのであって、このような感動が、日頃の授業面にも取り入れていけるならば、生徒の喜びが、一層増すことと信じる。

以上、標題に示した、「音楽の授業を魅力あるものにするには、どうしたらよいか」の解答にはならないと思うが、しかし、この精神に基いて、具体的な問題解決に努力したいと考えている。